佐藤優 評

サリン事件死刑囚 中川智正との対話

アンソニー・トゥー著(KADOKAWA・1512円)

7月6日にオウム真理教事件関係の麻原彰晃ことと松本智津夫死刑囚ら7人、同26日に6人の死刑執行がなされた。これでオウム真理教事件で死刑が確定した13人の刑の執行はすべて終了した。しかし、なぜ人間の救済を教義に掲げる宗教団体が大量破壊兵器を用いた殺人に手を染めたかについての解明が十分になされたとは言えない。そのような状況で、本書が上梓された意義は大きい。

アンソニー・トゥー博士(米国コロラド州立大学名誉教授)は、ヘビ毒の世界的権威で生物・化学兵器に関して詳しい。日本の警察に協力してオウム真理教によるサリン事件解明のきっかけを作った人物だ。トゥー氏は、坂本堤弁護士一家殺人事件、松本サリン事件、地下鉄サリン事件、東京都庁小包爆弾事件などに関与し、死刑が確定した中川智正氏と2011年から15回面会した。面会の目的は、オウム真理教による生物・化学兵器製造過程を調査することだ。面会と文通によって2人の間には人間的信頼関係が構築された。その結果、生まれた作品が『サリン事件死刑囚 中川智正との対話』だ。本書の公刊は死刑執行後にしてほしいと中川氏は要請した。トゥー氏はそれを受け入れ、6日に中川氏が麻原死刑囚ら6人とともに絞首されたのち、刊行された。

加害者になってしまう構造的問題

トゥー氏は、中川氏を人間として尊重していた。そのことが以下のエピソードから読み取れる。〈私は毎日新聞の警視庁付の記者からこんな話を聞いた。警察も中川氏がオウムに関する知識が豊富でかつ協力的であることを知り、彼を呼んで警察の人達に講義してもらいたいと思っているという。確かに中川氏の講義を受ければ、警察にはたいへん有益だろう。しかし、道義的によくないと私は思った。利用するだけ利用しておいて、後で殺してしまうのは道義に反するのではないかと思ったのである〉。中川氏から最大限に有益な情報を搾取するという功利主義的な態度にトゥー氏は静かに異議を申し立てている。

トゥー氏は、優れた人間観察力を持っている。それだから中川氏の麻原死刑囚やオウム真理教に対する評価が維持していることを見抜いた。〈裁判の記録では中川氏は当初は麻原を尊敬して尊師と呼んでいたが、そのうちに麻原は「狂っている人」と批判したこともあった。中川氏の心の中で麻原に対する「畏敬」の念と「憎悪」の念という相反する気持ちが共存しているのだと思う。時間の経過とともに「憎悪」が強くなるが、時々「畏敬」の念が突然出てくるのではないかと思う。/同じことが「オウム教団」についても言えるのではないかと思う。まだ逃走犯が逮捕されていないとき、私は中川氏に聞いた。「この3人はオウムの秘密を守るため、オウムによって殺害されてしまったと言う人もいますが」。すると彼は即座に反論した。/「オウムは思実な信徒を殺すようなことはしませんよ。この3人に秘密なんてありません。秘密を知っている人は皆この拘置所の中にいますよ」/これではまるでオウムは悪くないと思っているような言い方でもある〉

麻原死刑囚には、他者の魂をつかむ類い稀な能力があった。オウム真理教には難関大学出身の若者が多かったが、偏差値で測られる教科書の内容を記憶して再現する能力では、人生の意味を問う人に対して答えを与えることはできない。人間は誰もが不安や闇を抱えている。中川氏は、教祖に帰依することによって人生の根源的問題を一挙に解決できると思ったのであろう。絶対に正しい教えがあると信じ込まされてしまった中川氏は被害者である。その被害者が、殺人に手を染める加害者となってしまうところにオウム真理教事件の構造的問題がある。

中川氏は、去年2月、マレーシアの首都クアラルンプールで起きたVXガスによる金正男暗殺事件の際にも、真相究明に努力し、獄中から論文を発表した。その動機について、今年7月2日にトゥー氏に宛てたメッセージでこう記している。〈私が論文を書いたり、研究者に協力しているのは、私がやったようなことを他の人にやって欲しくないからです。被害者を出したくないのもそうですが、加害者も出て欲しくないと思っています。裁判ではこのようなことを十分には話せませんでした。マレーシアの事件を分析するには、医学知識はともかく、私の化学知識は不足していたので、ずい分勉強しました。死にたくないというのが理由ならば、あんなに勉強しません。北朝鮮の政府内には、オウム真理教の起こした事件を研究していた部署があるそうです。VX塩酸塩のことは教団のやったことを研究しないと思いつかないと思います。いきがかり上、どうしても書きたいと思いました〉

被害者がしばらくすると加害者となってしまうというカルトの危険について、学校教育の場で教えなくてはならない。宗教でも思想でも心の問題を一挙に解決できるというような言説はすべて偽物だ。日本人の宗教リテラシーを向上させなくてはならないと痛感した。

ミセス 9月号

(文化出版局・1132円)

書店の雑誌売り場の大半を占める女性誌の数々だが、どれもファッション写真ばかりで、読むところが少ないという印象がある。ところが、そんな中で『ミセス』は、例外的にいつも読みでのある文化記事を掲載している。9月号は特集「日本文化の新しい試み」。現代美術作家杉本博司が設計した「江之浦測候所」を深津檜里が訪ね、ラウンジ「水戯庵」で森里・森パネラ母娘が能を鑑賞するといった記事が続く。その他8ページも割いて『長くつ下のピッピ』の作者リンドグレーンについて素晴らしい紹介があり(童話作家の角野栄子も寄稿)、読書欄では『樽とタタン』の著者中島京子インタビューと、斎藤美奈子による新刊4冊の書評といった具合だ。なんとも贅沢。(沼)

MAGAZINE

今週の執筆者

「この3冊」は一橋大名誉教授の野口悠紀雄さん。著書に『入門 ビットコインとブロックチェーン』。荒川洋治さんは現代詩作家▽川本三郎さんは評論家▽雲嶺さんは明治大教授(比較文学)▽岩島正さんは京大名誉教授(米文学)▽佐藤優さんは作家・元外務省主任分析官。「昨日読んだ文庫」の絵は舟橋全二さん。

武満徹の電子音楽

アルテスパブリッシング・1万2960円

著者 川崎弘二(かわさき・こうじ)さん

手に取った時のズシリとした重みが、ただならぬ本であることを教えてくれる。20世紀後半の日本の現代音楽をリードした武満徹(1930~96年)の創作活動を、徹底的に検証した一冊。「なんで、武満はここでこんな作品を作ったのか。なんで、こんなことをやっていたのか。

『知りたい』という思いが根底にありました」。強い好奇心に突き動かされた研究の成果は、重さ約1・7㌔、本文だけで120万字を数える1000㌻超の大作に結晶した。

武満が「混雑した地下鉄の狭い車内で、調律された楽音のなかに騒音をもちこむことを着想した」とされる48年から記述は始まる。ファクトに徹した筆致で、武満と彼の周囲の創作の記録が年代順に丹念に積み重ねられる。「画家や写真家、詩人ら同時代の芸術家たちと武満の交流をクロノロジカルに記すことで、戦後のメディアパフォーマンス史が浮かび上がってくると思いました」。NHKの番組アーカイブスを使った調査では、「実はこのテレビ番組のための音楽も武満が作曲していた」曲も多く見つかった。まさに、武満音楽の大事典ともいえる。

ファクトに徹した筆致

「その辺のレコード・オタク」程度だったという。

転機は27歳の時。エレクトロニクスを使った独自の表現で知られる小杉武久の音楽に出合って衝撃を受けた。以来、彦坂の研究と並行して、『音楽芸術』や『芸術新潮』などの戦後のバックナンバーを1~2㌻ずつめくり、電子音楽の記事を調べていった。2006年には『日本の電子音楽』(愛育社)を出版。3年前には准教授で大学を辞め、本書の執筆活動に集中した。

なぜ、そこまで魅了されるのか。「武満は、『オーケストラ曲しか書かないんだ』という姿勢ではなく、映画やラジオ、テレビのための音楽も幅広く作曲し、技師や職人など他の分野の人たちとも共同で仕事をしました。集団作業によってこそ突破できるものもある。それに果敢に挑戦した武満に共感を覚えます」

幼いころから電子音楽に魅了されてきた。「小学生の時、坂本龍一らがいたYMOの曲を聴いていました。そこから高橋悠治、武満へとつながっていきました」。高校では「話が合う友達が一人もいなかった」ほどのめり込みぶり。「当時、買ったレコードや書籍が、執筆の役に立ちました」と笑う。ただ、祖父の代からの家業を継ごうと歯科大に通い、音楽については

文と写真・広瀬登

ガルヴェイアスの犬

ジョゼ・ルイス・ペイショット著、木下眞穂訳(新潮クレスト・ブックス・2052円)

この黙示録的物語は、もう一つの『1984年』だ。一九八四年のある真夜中、宇宙から未知の物体が「ガルヴェイアス」の村に落ちてくる。物体はすさまじい熱気と臭気を放ち、猛烈な豪雨が一週間つづいて突然やむ。村人たちは物体のことを忘れていくが、犬たちは忘れない。

連作短編のような造りだ。章ごとに一人の村人に焦点を当て、静しく素朴な暮らしを全編つぶさに、ひたすら淡々と描きだす。登場人物は多大。本書に短評を寄せた滝口悠生によれば、九十九人に上るとか。人だけでなく、犬、道、公園、山など、すべての名前が明記される。

様々な人間ドラマと暴力がある。浮気、不倫。土地財産をめぐるいざこざ。家同士の対立や、兄弟間の長年の仲たがいがある。閉鎖社会の排他的空気のなか、よそ者の女性教師の机に犬の死骸が置かれたりする。

犬の視点で書かれた章が要だ。犬たちだけは、この村で腐敗が進行していることに気づいているのだ。

ラストで、ひと筋の啓示の光が射す。訳者によると、ポルトガルの一九八四年とは、新時代の夜明け前なのだという。最先端のポルトガル文学の登場を寿ぎたい。(鴻)

ルポ 保育格差

小林美希著(岩波新書・907円)

大都市で子どもを保育園に入れるのは容易ではない。保活で奔走し、何とか入園ができても、安心はできない。そんな実態を教えてくれる。

保育の質の差があまりにも大きいのに驚かされる。あからさまに特定の子を嫌がる保育士。一日中園児にテレビを見せている園。一方で「家族が幸せでなければ子どもは幸せに

ならない」「保育士が穏やかだと子どもが穏やかになる。それを見た親も穏やかになっていく」という信念で、子どもと親、保育士にまで目を配る園も。親は預ける前に園の実態を調べなければならないことが、改めて分かる。

低賃金の実態も赤裸々だ。国は保育士の人件費を委託費の7~8割と想定しているが、書者はそれをはるかに下回る法人を列挙する。公費の委託費を受けている以上、財務内容の説明は義務にも思えるが、書者の取材に「答える必要がない」「回答は控えたい」という反応があるという。やりがいを感じつつも離職せざるを得ない保育士が痛々しい。

虫の目の報告のみならず、全体を見渡した上での改善策も示されており、親や保育園のみならず行政の指針にもなりそうだ。(栗)

昨日読んだ文庫

久保利英明 弁護士に、必要なものは「三つのY」だと故萩原金美先生(神奈川大学名誉教授)から教わった。Yとは「やさしい心、やわらかい頭、そして勇気の頭文字だ」という解説付きだった。知識はいくらでも得られる。それを社会のために生かすのは心と頭の使い様だという。

分かった様で分からない。特に「やさしい心」って何だろう。難しい事件の解決に何の役に立つのだろうか。弁護士になって10年が過ぎた頃、それが少し見えてきた。ゆとりのない、ひからびた、心では、関係者を幸せにすることはできないぞ、という警告だと気がついた。そんな頃、子どもの頃に読みふけった『小川未明童話集』(小川未明著 もも・新潮文庫)がふと目に入った。「人魚は、南の方の海にばかり棲んでいるのではありません。北の海にも棲んでいたのであります。」と始まる「赤いろうそくと人魚」は、人魚の子を我が子として慈しむやさしさと、金に心を奪われて鬼のような心持ちになって

しまった老夫婦の心の変化を描き尽くしている。人間は仏にも鬼にもなるのだ。

「小さい針の音」は、出世しようと都へ出て勉学をし、会社の重役にまで登り詰めた田舎の小学校の教員の話しである。金時計からプラチナ時計と次々と豪奢なものに買い替えた。餞別として、子どもたちが贈ってくれた懐中時計は古道具屋に売り払った。しかし、どんな時計も、あの懐中時計の正確さには比べるべくもなかった。そんな時、職場で「1秒も狂わない」と下級社員が示した時計の裏側には、彼が苦学生のとき、作った晃覚えのある傷があった。男はこれをもらい受け、枕元において、いつになく安らかな眠りにつく。夢の中に、寒村の小学校の教壇に立つ昔の姿が浮かび上がる。男は「おれは社会のために何をしてきたのか」と跳ね起きる。カチカチと刻む時計の音は無邪気な子どもたちの笑い声に聞こえた。

どの短編もやさしい心と世俗利益の葛藤に満ちている。私は毎年、正月には、この文庫本を拾い読みして、やさしい心と子どもの気持ちを取り戻そうとしている。(弁護士)

日本最高峰の出版翻訳専門学院を目指し、約300人のプロ翻訳者を輩出!
日中翻訳学院 祝 設立10周年
塾生の訳書 好評発売中!

東 滋子訳 中国の未来 1800円
石垣優子訳 佐島玲子訳 中国のグリーン・ニューディール 2300円
森 宣之訳 人民元読本 2200円
平岡初美訳 中国発展報告 3800円
速水 澄訳 チャイニーズドリーム 1900円
重松なほ訳 中国人の価値観 1800円
井田 綾訳 中国出版産業データブック 2800円
林 永健訳 中国による平和 2500円
黒金祥一訳 中国名記者列伝 3500円
川村明美訳 「一帯一路」詳説 3500円
小森谷玲子訳 SUPER CHINA 第13次五カ年計画 2700円
森 永洋花訳 日覚めた獅子 1800円
脇屋克仁訳 松井仁子訳 中国企業成長調査研究報告 2800円
大国の責任とは 現代中国カルチャーマップ 3500円
本田朋子訳 新疆物語 大国の責任とは 2800円
町田 晶訳 河村知子訳 永久保存版 新疆世界文化遺産図鑑 2500円
漫画で読む 李克強総理の仕事(日中対訳版) 980円
悩まない心をつくる人生講義(明石康氏 推薦) 1800円
新中国を拓いた記者たち(上・下巻) 各2800円
中西 真訳 日本人には決して書けない中国発展のメカニズム 2500円
中国の発展の道と中国共産党 3800円
安武真弓訳 大島義和訳 中国集団指導体制の「核心」と「七つのメカニズム」 1900円
中国コンテンツ産業対外貿易の研究 4800円

人気の中文和訳講座 受講生募集中!
第2期 高橋塾 講師 高橋弥守彦 大東文化大学名誉教授
高橋塾 基礎力となる翻訳テクニック8項目を紹介!
中日対照言語学概論 中日両言語の違いを知り、互いを理解するための一助となる言語学概論 高橋弥守彦著 3600円

小室あかね訳 一角札の冒険 1800円
藤村とも恵訳 少年音楽物語 1900円
柳川悟子訳 博士と幽霊 1900円
東 滋子訳 小さなぼくの日記 各2800円
藤村とも恵訳 わが子たちへ 2500円
船山明音訳 少年美術物語 3800円
黒金祥一訳 中学生小品 1900円
豊子愷(ほうしかい) 児童文学全集 全7巻 各1500円

海老名香葉子氏推薦!
エッセイスト・絵本作家

中国コンテンツ産業 対外貿易の研究
経済大国から文化強国へ!
劉 建華著 日中翻訳学院 大島義和訳 4800円

中国の喜 韓国の怒 インドの哀 日本の楽
関口知宏著
「ことづくりの国」日本へ そのための「喜怒哀楽」世界地図
NHK「中国鉄道大紀行」で知られる著者が、世界を旅して見出した日本の目指すべき指針とは?
1600円
イラスト・毛筆文字 全て関口氏オリジナル
読売などメディアで話題!
※表示価格はすべて税別です

「大平学校」と戦後日中教育 文化交流
日本語教師のライフストーリーを手がかりに
中国日本語教育研究会 名誉会長 徐一平
早稲田大学教授 新保敦子 推薦!!
孫暁英著 3600円
日中平和友好条約締結40周年記念出版

日中翻訳学院 月刊メールマガジン 無料
日中中日 翻訳フォーラム
登録先 http://fanyi.duan.jp/

日中翻訳学院10周年記念イベント
翻訳成果 展示・報告&交流会
プロ翻訳者との対面交流で翻訳のノウハウを共有!
日中出版翻訳の最前線の空気を肌で感じるチャンスです
講師 段端中・町田晶・大島義和
※お申し込みは下記アドレスまで
8月25日(土) 午後3~5時 西池袋
★午後1時より同会場にて「無料出版相談会」開催
お申し込み・お問い合わせは info@duan.jp

日本僑報社 〒171-0021 豊島区西池袋3-17-15 Tel. 03-5956-2808 Fax. 03-5956-2809 info@duan.jp
The Duan Press
http://jp.duan.jp/ 出版翻訳専門の日中翻訳学院 おかげさまで10周年